

文化のまちづくりとシビックプライド ～金沢における2つの循環～

埼玉大学 人文社会科学部 准教授 うちだ なおみ 内田 奈芳美



1 文化のまちづくりとシビックプライドの好循環

私が石川県金沢市のまちづくりに関わりだして、7年近くが経ちます。きっかけは当時金沢の大学に赴任したことでした。「シビックプライド」という言葉の定義は本特集内の他の寄稿で示されると思いますが、金沢はこの言葉がピッタリだと思います。金沢に暮らすと、金沢のシビックプライドとしての市民のまちに対する「誇り」は加賀藩とそれを治めた前田家による城下町としての文化の蓄積に基づくものだと感じられます。これほど端々に藩政期の記憶と藩主に対する意識が現代にまで残っているところは見たことがありません。よく勘違いされることですが、金沢は「小京都」ではなく、武家文化の根付く都市です。もっとも、そういった誇り高き文化も開発が急激に進んだ戦後ある一定の時期には、それほど意識が向けられていなかったように思います。しかし、地域資源の再認識が進み、その後「文化のまちづくり」として、シビックプライドに基づいた地域づくりが蓄積されてきました。

金沢で地域の議論に参加してきた立場として、以下の2点を本稿の論点としたいと思います。

- (1) 「シビックプライドが文化のまちづくりを後押しすること」
- (2) 「文化のまちづくりを通してシビックプライドを醸成すること」

地域づくりには、この2つによる好循環を生み出すことが必要だと考えています。この2つは循環し合うものであり、どちらが先ということはありません。

地域資源の種類は金沢と埼玉ではもちろん異なりますが、こういった好循環を生み出すための要素や必要事項というのは共通していると思います。そういった共通した要素を考えつつ、金沢を1つの好循環事例として本稿で示していきたいと思います。

2 金沢のシビックプライド

まず背景として、金沢のシビックプライドがどのように形成されたのかということについてお話ししたいと思います。

先日、これまで一緒に地域のまちづくりについて議論してきた秋元雄史氏（東京藝術大学教授、前金沢21世紀美術館館長）が「おどろきの金沢」^(参考文献1)という本を出しました。その中で、このようなことを述べています。

「300年以上かけて蓄積してきた文化と精神性が、そう簡単に消えるものではないとうなずける。これが、金沢が今でも『城下町』たるゆえんなのだろう。だから『城下町金沢』はプライドが高い。」¹

少し状況を補足しますと、私も元々城下町の出身ですが、同じ城下町でも金沢は全く意識が異なります。例えば参考文献1でも同様なことが述べられていましたが、今でも金沢市民は「前田さん」と当時の藩主のことを呼び、話題にしますが、私の出身地で藩主の話をしている人はあまり見たことがありません。それくらい金沢では城下町文化に対する身近さが違うということです。

加賀藩は百万石の巨大な領地を持つ立場として、江戸時代には文化振興にお金をつぎこみ、江戸幕府に対して謀反を起こすことはないとのポーズをとり続けてきました。そのような背景もあって当時工芸

をはじめとした文化が華開き、その基盤が現在の金沢のプライドにもつながっています。加えて、戦災に遭わなかったことで藩政期の道路が多くはそのまま残り、町家も京都ほどの数ではありませんが、まちを歩けばあちこちに残存しているのが分かります。そういった、空間として藩政期を意識させられることも現在のまちへの誇りにつながっていったのです。そういう意味では、シビックプライドを醸成しやすい幸運なまちであったとも言えます。

3 金沢市による文化のまちづくり

ただし、幸運だけが金沢のまちを誇り高き空間としたのかというと、そうとは言えません。戦災も大きな自然災害も無かったことで様々な歴史的空間が残る金沢市でしたが、やはり戦後の高度成長期には、旧来型の住居である不便さや基盤整備などから次々と町家が放置されたり、壊されたりしていきました。一方で、中心部には高層のマンションが次々と建設されていきました。そのような中、金沢市がなにを施策として行ってきたかということは、自治体が文化のまちづくりを考える上でのヒントとなると思います。

最初に述べた「シビックプライドが文化のまちづくりを後押しすること」＋「文化のまちづくりを通してシビックプライドを醸成すること」という循環を後押ししたこととして、金沢では景観・コミュニティ・空間づくりという3つのポイントがあったと考えます。

(1) 誇りとしての多様な「景観」

金沢市ではいち早く景観保全のための条例（「伝統景観保全条例」1968年）を策定し、景観保全についての政策を進めてきた経緯があります。これまでに景観に関連した条例として、用水保全条例や夜間景観形成条例などを定め、先進的な景観関連施策を行ってきました。例えば用水保全条例の背景として、用水が高度成長期にはふたをされて暗渠となり、駐車場等に活用されていたということがありました。

条例によってそれらを撤去し、用水をオープンにしたことによって、一時期は途絶えていた美しい用水景観が蘇りました。今の金沢では、用水はひとつのシビックプライドとなり、中心部では用水沿いにおしゃれな新規店舗が並ぶようになりました。



まちなかの用水 （撮影：筆者）

そしてもう1つ金沢での特徴的な景観政策として、「こまちなみ」の保全というものがあります。これは、金沢を特徴付ける歴史的景観の保全のため、市内に現在4地区ある重要伝統的建造物群保存地区（以下伝建地区）の指定だけでなく、伝建地区ほど面的に歴史的建造物が残っていないながらも、重要な景観特性をもつ地区を条例で「こ（子・古）まちなみ保全地区」（＝小さな規模で残る、古いまちなみ）と定義して保全を行ってきたものです。

このような多方面にわたった景観に関する施策の徹底は、地域資源に対しての住民の誇りをさらに高めたといえるでしょう。

(2) 誇りとしてのコミュニティ

また、住民の地域への誇りを高めるコミュニティ面からの施策として、旧町名復活が行われました。これは、住居表示法以前にかつて使われていた地名を復活させ、歴史的な地名を地域に取り戻すものです。このような施策には大きく2つの意味があります。まず、歴史的な地名はその場所の特徴を示すものであり、それを取り戻すことが地域の誇りと愛着を高めることにつながるという点です。次に、旧町

名を復活させようとする住所の変更が伴いますから、全員合意が必要となりますので、コミュニティの結束を高めることにつながるという点です。この施策によって旧町名が復活した地域では、復活後は地域活動が盛んになるなど「まちの様相が変わっていく」²ことにつながったとのことでした。

（３）新たな誇りをつくる空間づくり

ここでの「空間づくり」とは、新たな空間をまちの中に埋め込んでいくということです。歴史的なまちなみの中に新たな空間を調和させ、新たな誇りをつくるというのは、非常にデリケートな計画が必要になります。このような空間づくりの例として、金沢で著名な現代建築としては、まちなかでは金沢21世紀美術館や鈴木大拙館があり、また、郊外では金沢海みらい図書館などのすぐれた公共施設のデザインがあります。また、低容積での再開発を行った「身の丈再開発」の事例としてしばしば参照される近江町市場の再開発もまちの中心部に位置し、新幹線開通後はより一層のにぎわいを見せています。

加えて、空間として地域資源の誇りを伝える手段としてリノベーションも数多く行われてきました。紡績工場をリノベーションした「金沢市民芸術村」（ダンスや音楽の練習、アートの制作・展示などの場所）、豪農の住宅をリノベーションした「金沢学生のまち市民交流館」（学生やNPOが活動拠点として使える場所）などがその事例です。こういった公共施設や公共の空間は必要な公共サービスを提供するだけでなく、新たな誇りや、既に存在する地域資源を地域のプライドをつくる空間として復活させる役割を果たしてきました。これらの空間づくりは、建築を見るために金沢を訪れるという人たちも生み出しました。このような誇りを高めるための空間づくりとしては次のような条件があると思います。

第一に、地域ならではの価値を持つ計画をつくるための仕掛けを行うことです。前金沢市長の山出氏は、近江町市場の再開発の際に「東京のコンサルタントの案を鵜呑みにしてはいけない」³と考え、近

江町市場再開発の計画のために組合と地元の学識経験者が参加する委員会を立ち上げて議論を行ったと述べています^{参考文献2}。地域を熟知した計画づくりのためのプロセスによって、どこにでもあるような計画ではなく、その地域ならではの価値をつくるのが可能になります。近江町市場では低容積での再開発を行い、歴史的な建造物を曳き家（建物をそのままの状況を保って動かすこと）することで保存を行いました。近江町市場は、再開発後も内部は古くからの都市骨格を残し、市場のにぎわいを保っています。

第二に、これまで気づかれていなかった地域資源を慎重に発掘するということです。例えば「金沢学生のまち市民交流館」となった建物は、中心部で長年空き家のまま置かれていたものでした。再活用の計画を知るまでは、保存状態から言って、この建物はいずれ壊されるのではないかと考えていました。しかし、その建物が交流館としてリノベーションされたことで、内部に伝統を伝える貴重な細工が施されていることを初めて知ることができたのです。こういった伝統的な細工などは、新しく作れるものではありません。このような地域資源の発掘には、すでに地域にあるものについて価値を見極める眼が重要であり、それを判断し、活用できる専門家の存在が必要となります。



金沢学生のまち市民交流館（撮影：筆者）

第三に、住民参加や住民への空間開放など、自分たちの場所であるということを感じさせるプログラムの必要性があります。例えば「金沢市民芸術村」は24時間オープンし、市民による自主運営を行っていますし、「金沢21世紀美術館」は、夜遅い時間にも無料開放部分に入ることができます。自分たちの場所である、という場所への愛着はシビックプライドの形成につながるものです。もっとも、当初この「金沢21世紀美術館」は先述した秋元氏の著書にもあるように、金沢の文脈にない現代美術を扱う場所で会ったが故に「嫌われていた」⁴というのです。オープン後、無料開放部分の存在や子供たちへのプログラムなど、様々な住民との関係づくりがあったことによって、今のようにまちの誇りの拠点となったのです。

これらの条件と事例が示すように、シビックプライドとは古いものを活用するだけでなく、新たな価値を創り出していくなかで形成されるものでもあるでしょう。

4 民間セクターによる行動

一方で金沢では、市役所による施策だけでなく、民間セクターも好循環を後押しする上で大きな役割を果たしてきました。特に経済界の文化的活動が盛んであり、経済同友会による金沢の今後を議論する「金沢学会」や、金沢青年会議所等による浅野川周辺の町家を活用して工芸を展示し、回遊を促す「浅野川工芸回廊」などの活動があります。

中でも、私が一緒にまちづくり活動をしているのはNPO法人趣都金澤というところで、この団体はもともと金沢青年会議所のOBが活動を始めたものです。今では会員が200名を超え、東京にいる会員のための委員会ができるほど活動の範囲が広がっています。活動としての地域の誇りづくりは以下のようなかたちで行われています。

(1) まちの誇りについて問い、広める

まちの誇りについて問い、広めるための活動とし

て、半年をかけて市民と山出前市長がまちづくりの意義について議論し、私も参加して「金沢らしさとは何か」^(参考文献3)という書籍を出版した経緯があります。同著の中で、「金沢らしさ」とは、

「①ヒューマンスケールの親しさ」

「②緑と水のいやし」

「③ハイグレードのこだわり」

「④もてなしと思いやり」

の4点であるとししました⁵。

この時挙げられた「金沢らしさ」をみると、まちにとって「らしさ」を考えることは、まさにまちの誇りを考えることと同義であるようです。こういったことを書籍として出版するなど、まちの誇りについて問い、広めることを行ってきました。

また、現在は「まちひとサロン」と称して、「工芸建築」を考える議論の会や展示会を行っています。これは、金沢の誇りとしての工芸と、町家を含めた建築文化を合わせて考える、新しい文化を生み出すことを目的とした活動です。東京でも同テーマでシンポジウムを行うなど、民間の活動として金沢の誇りを広めようとしています。

(2) まちの誇りの「利活用実験」

また、まちに存在している歴史的資源の「利活用実験」を行ってきました。例えば金沢の都市の発祥の地と言われる「久保市乙剣宮」神社で、地域コミュニティを巻き込んだ市を毎年行っています。もともとこの神社の前で行われていた市場から金沢が始まったという歴史があり、誇りとしての歴史を再認識するべく、こういったことを始めたのです。その後も「金沢宮遊」と題して、地域内に位置する神社で大人が楽しめるお宮遊びを提供する試みを行いました。こういったことは、行政所有でない「公共」空間の利活用であり、かつてコミュニティの中心であった神社という地域資源の活用であると言えます。



都市の発祥地である神社の利活用実験

(撮影：筆者)

これらの「実験」を行う際には、その場所や利活用の内容に前述した「金沢らしさ」があるかどうか、またそういった基準で何を行うべきかという判断が常になされているように思います。

5 循環：埼玉でのまちづくりへの示唆

このような活動に携わりながら、金沢で5年暮らしたあと埼玉県に赴任してきました。その時感じたこととして、埼玉と金沢では「文化」という言葉を聞いたとき、市民が想像するものは異なるのではないかと思います。金沢は城下町文化の存在感の高さもあって、自分の生活の周りに文化の存在を意識しやすいですが、埼玉では、文化というと劇場や芸術といったハイカルチャーのような、どこか毎日の生活とは切り離された、特別な響きを持っているかもしれません。

ただ、地域に対する愛情や誇りは、埼玉の住民も同じだと思います。愛情や誇りを場所に対して持つということ自体が都市文化であると認識することが、シビックプライドとしての文化のまちづくりの入り口ではないでしょうか。もっとも、埼玉は人口が多く、通勤先の関係から地域で過ごす時間が少ない分、それを共有し議論する「場」が見つかりにくいということは感じています。誰とシビックプライドを共有すれば良いのか、それ自体が分からないのです。

シビックプライドは、議論し、共有することで初めて存在すると思いますので、人口が多い埼玉ではそれを実感しにくい状況であるかもしれません。

ただ、ここで言うシビックプライドを醸成する文化は、必ずしも古いものとは限りませんし、ハード面だけに限ったことでもありません。「金沢らしさ」で挙げた4項目も、日々の生活のあり方自体が文化であるということを示唆しています。したがって、「金沢だからできるのだ」ということではなく、埼玉においても文化のまちづくりを考え、共有することがシビックプライドの醸成との好循環を生み出していくと考えます。

以上のことを踏まえて、埼玉において「シビックプライドが文化のまちづくりを後押しすること」＋「文化のまちづくりを通してシビックプライドを醸成すること」という循環を後押しするための示唆として、次の2点を挙げたいと思います。

第一に「自分たちの文化とはなにか」を考える行為自体が必要であるということです。「何もない」というのではなく、それぞれが感じている地域の誇りがあるはずです。地域の誇りを共有し、議論の俎上に載せてみる必要があると考えます。「らしさ」を考えることは、一見遠回りのような、もしくは空中戦の議論のように見えるかもしれませんが、こういった議論を行うことを通じて、筋の通ったまちづくりの判断指針が形成できます。

第二に、住民による意識の共有が進んだ後には、それを実践するための「実験」をやってみることが必要だと考えます。かといって何でもイベントをやるという意味ではなく、シビックプライドを共有するという原則を持った上で、なにをどこで行うべきかという判断をしていく必要があります。こういったとき、前述したように「らしさ」の議論があれば、一つ一つのイベントにもどういった意味があるのかということ価値判断できます。

これらのことは、文化自体のあり方が異なっていたとしても共通する法則だと考えます。埼玉の場合

「地域」と呼べるものが、人口数や市町村数の多さからいって、非常に細分化されることかと思いますが、それは逆に言えば自分の生活圏を地域の範囲として意識しやすくなるということであり、隣接地域

が競り合いながら都市文化として華開きやすくなるということでもあると思います。そういった利点を活かして、文化のまちづくりを支えるシビックプライドが議論されることを期待します。

脚注

- 1 参考文献1 p103より引用
- 2 参考文献2 p.219より引用
- 3 参考文献2 p. 176より引用
- 4 参考文献1 第一章タイトルより引用
- 5 参考文献3 pp. 187-190より引用

参考文献

- 1 秋元雄史『「おどろきの金沢」』、講談社、2017年
- 2 山出保『金沢の気骨』、北國新聞社、2013年
- 3 山出保、まちひと会議編『金沢らしさとは何か』北國新聞社 2015年
- 4 金沢市「金沢の景観」<http://www4.city.kanazawa.lg.jp/29020/keikan/index.html>
- 5 金沢市「旧町名の復活」<http://www4.city.kanazawa.lg.jp/22050/kyuchomei/index.html>
- 6 金沢創造都市会議・金澤学会 <http://www.kanazawa-round.jp>
- 7 NPO法人趣都金澤 <http://syuto.or.jp>

寄稿者 PROFILE

内田 奈芳美（うちだ なおみ）

埼玉大学人文社会科学部研究科 准教授

アーバンデザインセンター大宮 副センター長

経 歴：2004年ワシントン大学修士課程修了、2006年早稲田大学大学院博士課程修了。

博士（工学）。専門は、都市計画・まちづくり。金沢工業大学環境・建築学部講師などを経て、現職。

主な著書：『まちづくり教書』・『まちづくり図解』（共著、鹿島出版会 2017）、『自分にあわせてまちを変えてみる力〜韓国・台湾のまちづくり』（共著、萌文社 2016）、『都市はなぜ魂を失ったか〜ジェイコブス後のニューヨーク論』（共訳、講談社 2013）、『まちづくり市民事業』（共著、学芸出版社 2011）